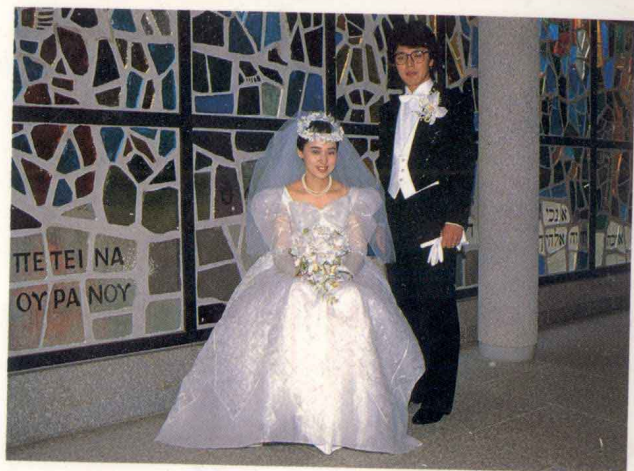


一年遅れのウェディング・ベル

わたしは車椅子の花嫁さん



鈴木ひとみ

わたしは車椅子の花嫁さん

一年遅れのウェディングベル

鈴木ひとみ

日本テレビ

一年遅れのウェディング・ベル

1986年 7月12日 初版発行
2000年10月12日 第 61 刷

著 者 鈴木ひとみ
発行者 河本 達二
発行所 日本テレビ放送網株式会社
東京都千代田区二番町14番地
〒102-8004 電話 (03) 5275-1111 (大代表)

印刷所 図書印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替え致します。

©HITOMI SUZUKI

1987 Printed in Japan

ISBN4-8203-8629-8 C0095

定価はカバーに表示してあります。

一年遅れのウェディング・ベル

目次

序章 一年遅れのウェディング・ベル

5

一章 運命の日 9

事故 頸椎骨折 手術 私の足が！

二章 病院のベッドで 29

生きてるっていえるの？ 夜が怖い 二度めの手術
動くようになんかならん！ 感情過多
幸せ、不幸せ 私はフツーじゃない!!

三章 普通の女の子 61

大阪・森の宮 夢は、およめさん
火事 ギター 青春 伊勢の海

四章 準ミス・インターナショナル 81

就職 予選出場 準ミスに選ばれた日 モロツコへ

五章

出合い、そして恋

103

出合い・身延の撮影会 恋・夕暮れの小田原で

六章

幸せの日々

117

ミスと銀行員の間で ブレスレット 対馬旅行 モデルになりたい
モデルという世界 スキューバ・ダイビング ニューカレドニアの海で

七章

涙の婚約指輪

145

リハビリテーション 手紙 車椅子 婚約指輪 トイレに移れた！

八章

国体優勝

173

明るくなった私 駒沢のスポーツ大会 人に頼む勇氣
練習、そして練習 ささやかなプロテスト 対等な人間として
鳥取国体 退院の日

九章

そして今、わたしは……

201

車椅子というイメージ ありがとう、伸ちゃん！

装丁・レイアウト 里村万寿夫
表紙・序章・九章撮影 武田一男

序章

一年遅れのウエディング・ベル





昭和六十一年六月十四日。

私と伸ちゃん^{のぶ}は、赤坂霊南坂教会で結婚式をあげた。

式のあいだじゅう、伸ちゃんは、いつもとかわらず落ち着いて、やさしく私をリードしてくれた。

私と伸ちゃんが初めて出会ったとき、私は十九歳、彼は二十三歳だった。そして今、私は二十四歳、彼は二十八歳になった。

私たちは、この五年間への万感の思いを込めて、指輪を交換した。

へとうとう、伸ちゃんと結婚したんだ〜

と思ったとたん、涙が溢れそうになった。

五年間。長かったのか、短かったのか、私にはよく分からない。分かっているのは、ほんとにいろいろなことがあった、ということだけ。

この五年間、伸ちゃんは、ほんとに変わっていない。今日も、最初に会ったときと同じように、はにかんだような顔で、やさしく微笑んでいる。

この五年間、私は変わった。少くとも、外見は、大きく変わった。

五年前、私は、大阪の銀行の女子行員でもあり、準ミス・インターナショナルに選

ばれた女の子でもあった。

——そして今、私は車椅子の花嫁さんなのだ。

ウェディング・ベルが鳴る。

思えば私たちの間で、初めて結婚の話が出たのは、もう三年も前のこと。正式に結婚の予定が立てられたのは、二年前のことだった。

そしてほんとうなら、去年の今ごろ、私たちは結婚していたはずだった。でも、その予定は、あの事故のために果たせなくなってしまった……。

へもう、伸ちゃんと結婚できないのでは～

と、悩み、怖れた時期もあった。

けれど今、私たちは、すべてを乗りこえて、いっしょにウェディング・ベルを聞いている。

——ちょうど、一年遅れのウェディング・ベルを。

一章 運命の日



事故

ジリリリ、ジリリリーン！

へあー、もう少し眠りたいよう……

フトンをかぶったまま手をのばして、目覚まし時計を止める。これでよし、さあもうひと眠り。

ジリリリ、ジリリリーン！

へわーん、いまいましい時計め！

眠い目をこすりながら、時計を見る。七時五分過ぎた。

いけない！ もう起きなきゃ。今日は、甲府でカタログの撮影があるのだ。

へ都内の撮影ならよかったのに

ブツブツいいながら、もぞもぞとベッドから起きた。

さて、今日は何を着ていこうかな。

コシノミチコのパンツスーツに決めた。上はソデのないタンクトップで、スソはふ

とももまでしかない、ちよつと刺激的なデザインだけど、とてもカジュアルで、私の
お気に入りのひとつなのだ。

冷蔵庫から冷えたウエルチのグレープフルーツジュースを取り出し、コップにそそ
いで一気に飲みほす。ようやく、頭がスッキリしてきた。

素足にデッキシューズをはいて、大きなバッグを肩にかける。このバッグは私たち
のような職業についている者の玉手箱。必要なものは、なんでも取り出せる。

部屋を出て、エレベーターで下に降りる。

マンションの玄関を出る。さわやかな朝の光が、渋谷のビルの合間からさしてくる。
ほんの少し風が吹いて、私の顔に触れた。

目の前の環状六号線にはそろそろ車が溢れはじめ、通勤の人たちが足早に歩いてい
る。

十日前と少しも変わらない街の風景だ。

きのうまでの十日間、伸ちゃん^{のぶ}と二人で過ごしたニューカレドニアでの楽しい思い
出がよみがえる。白い壁の街並、スキューバ・ダイビングで潜った透きとおるように
青海海、そして浜辺でのバーベキュー……。

へでも、今日からはまた仕事。戸沢ひとみ、二十二歳、職業モデル。ガンバリマスー！
バッグを肩にかけなおし、タクシーを止める。

「渋谷まで、少し急いで下さい。」

昭和五十九年八月二日。

私の「運命の日」は、こうして始まった。

新宿から松本行きの中央線に乗った。車内はとてもすいていた。

列車は八王子を過ぎると、緑いっぱい景色の中を走る。

へ今度は、田舎でのんびりしたいな。休みをとって伸ちゃん（のぶ）と行ってみたいな。

私は、窓の外をながめながら、ボンヤリとそんなことを考えた。

二時間足らずで山梨に着くと、駅の改札口に、カメラマンの豊田さんとデザイナーの山下さんが、車で迎えに来てくれていた。

「おはようございます」

「おはようございます。どうぞよろしく」

山下さんとは初めての仕事だけど、三十歳を少し越えたくらいで若々しく、フリー

デザイナーとして最初の仕事ということで、すごくはりきっている。

カメラマンの豊田さんとはもう顔なじみ。前にいっしょに仕事をしたとき私を気に入ってくれて、今日の仕事も豊田さんの紹介なのだ。気楽な、いい雰囲気の仕事ができそうだ。私はうれしくなった。

思ったとおり、撮影は順調に進んだ。昼食をはさんで午後の一時半ごろには終わってしまった。桃園を使つての撮影だったので、仕事を終えた私たちはおいしい桃をそちそうになった。

「これ、ほんとにおいしいね」

山下さんは、よほど桃が好きらしく、大きな桃を二つもたいらげ、おみやげまでもらっていた。

あとは、もう東京に帰るだけ。

午後二時。RX7に、私たちは乗りこんだ。

今日は朝から山下さんがずっと運転していたけれど、撮影が終って緊張がとけたのか、帰りは豊田さんが運転するという。

「ひとみさん、どうぞ助手席に乗ってください」

と、山下さんは、しきりにすすめてくれたけれど、私は後ろの席にどうしても座るといつてきかなかった。RX7の後部座席はせまいので、スラリと長身の山下さんだときゆうくつだろうと思ったからだ。

結局、私が頑張つて、運転・豊田さん、助手席・山下さん、後ろに私ということになって、車は出発した。そして、このことが私たち三人の運命を分けたのだった。

はじめ、少しヘンなことがあった。車は確かに中央高速道路の入口を示す矢印の方に走っていったのに、しばらく走っていると、なぜか、さつき桃を食べたあたりにもどってしまったのだ。

「あれ、おかしいなあ」

と豊田さんがいった。

そして、もう一度、注意深く走っていくと、今度は無事に中央高速に入った。

ただ、それだけのこと。でも、なぜか不思議によくおぼえている。

安心した私は、座席で横向きに足を投げだした。とても、ゆつたりとした気持ちになつていた。

車は、快調に東京をめざして走っていた。